

# 徳之島聞書

上江洲 均 ★

## はじめに

1966年8月、湧上元雄先生を団長として、名嘉真宜勝氏らとともに7名で奄美諸島の民俗調査に出かけた。まだ復帰前のことと、パスポートを持っての調査旅行であった。調査地は、徳之島町全見。<sup>ミツミ</sup>山と手々の中間の小部落である。約2週間滞在中の宿舎は、当時区長をしていた宮内国之助氏の家であった。建てたばかりの鉄筋コンクリートの2階を私たちは独占した。その時の調査で私は「年中行事」を担当したが、結局報告書の作成まではいたらなかった。その調査の中から、聞き取りしたことの一部を紹介したい。伝承者は宮内国之助氏、太良屋宝嶺氏、中村義武氏らであるが、昨年(1984年)12月に訪ねてみると、ご三人とも故人になっていた。その時、話を聞いた人のなかには、宮内家をはじめとして鹿児島や大阪へ出ておられる方があり、18年の歳月の長さに驚いた次第である。(文中で「現在」は、1966年(昭和41年)のことである。)

## 親族語索

父	アージャ (a:dʒa)	母	アーマ (a:ma)
祖父	ジー (dʒi:)	祖母	アーン (a:ŋ)
私	ワーン (?wa:ŋ)	君	イヤー (ija:)
あなた	ウイー (?wi:)	あなたたち	ウイタ (?wita)、ウイター (?witta:)
おまえ	ウキヤー (?wkja:) (多勢のときも)	きみたち	イヤッキヤー (ijakkja:)
の人	アンチュー (アンツー) (an-chu:)	妻	トゥージ(tu:dʒi)
夫	ウトウー (utu:)	子供たち	ワレンキヤ (warenkja)
女の子	ウナグヌクワ (unagunukwa:)	男の子	インガヌクワ (inganukwa:)
赤ちゃん	アーワレ (a:ware)	老人	ウッチュ、ウイムングワ (uimungwa:)
おじさん	ジー (dʒi:)	若者たち	ニセンキヤ (nisenkja:)
処女たち	メーレンキヤ (merenkja)	兄	イーリ (ji:ri)
		姉妹	ウナリ、ウナイ (wunaji)

※他人の父を呼ぶときは、その長男か長女の名にアージャをつけて呼ぶ。宮内氏の場合は、みや子が長女にいたので「みや子アージャ」と呼んだ。

## 集落その他

集落のことを「シマ」という。旅へ出て自分の郷里を呼ぶときは、「ワーシマ」「ワキヤシマ」という。金見の部落を県道の上下に分けて呼ぶときは、上の山手の部落を「ヤムンバーリ」、下を「スンバーリ」という。また、上を「森の前」、下を「カネクアタリ」ともいう。バーリは「原」のこと、部落内を「○○バーリ」でいくつかに区切って呼ぶことがある。浜下りや宴会や演芸会を催す時はメー・ケッサントーという所である。上部落にはワインコー、下部落にはフーゴーという井戸がある。

(★うえず ひとし 県立博物館学芸係長)

ある。

ゆい、すなわち共同作業のことを「ユイワーク」(juiwa:ku) という。家を葺くカヤは、6尺まわりの大きさを「1しめ」といい、刈ってもらった分だけお返しをする。これはユイワークといわむコーという。隣りの山部落では「ムエ」(模合)があるが、ここではやっていない。金銭の立替えをすることはある、それを「イロイ」という。貯金は、婦人会でまとめてやっている。班長のところで集め、山の郵便局で預ける。それは毎月行い、集金人を順番でやり、班長のところへ持っていく。

日用品の買物は、部落内の店を利用するが、高い商品は亀津で買う。自分で行けない時は、近所の人が行くついでを頼んで買って来てもらう。

村内の通知は次のようにした。区長が法螺貝を吹き鳴らして村小使を呼び、他への連絡をさせた。全戸を集める場合は、つり鐘を2回打つ。婦人会のときは7回打つ。昭和の初めごろから鐘になつたが、昭和36年からマイクを購入した。

新築の時は、村から割り当てもなされた。それを「ヤテーブー」(jate:bu:) という。朝は8時から仕事開始である。そのような家へは、部落中から金品を贈った。それを「ミーメー」(見舞い)という。仕事に来た人に対しては、朝食から出す。朝食を「ネーサル」昼食を「アセー」、10時茶を「ヒンマチャー」、3時茶を「ユックイチャー」と呼ぶが、10時と3時のことを「サンスーキ」ともいう。このほか夕食は「ユーフィ」、夜中飯を「ユナユフィ」という。

イシズイ（礎石）を置く時は、塩、酒、米を供える。米は7回洗った洗い米で、それを棟梁が頭に3回のせる。中柱を立てる場合にも塩や酒を供える。新築祝いの時は、以前神職にあったばあさんが元気なころは、その人に頼んでお祓いをさせていた。

建築用材として、ヒツバ（楨）、シイなどを高級用材として使った。それらは、田にしばらくつけておくことが多かった。棟あげの歌がある。

しきゅま石 いしてい 黄金バヤ（柱） 立ていて  
ぬきさしぬ きゅらさ たていぬ きゅらさ

### 稻 作

種子下しは、9月ごろであった。それは酉の日をさけて行った。モチ米には、在来種のケモチゴメがあった。赤っぽく、平たく、ノギの長い品種であった。3日ばかり襄につけておき、それを取り出してすぐ播いた。植付けは、翌年の彼岸の中頃であった。

モチ米のことを「アヤゴ」という。現在は、アマミモチとアカモチが栽培されている。前者が昭和12、13年ごろ、後者は5、6年前に入った。この方は5日間水に浸してのち、取り出して茎に包み、発芽させる。現在は2期作するようになっており、1期目は2月10日ごろ種子下ろしをし、約40日ごろに植付けるから、だいたい3月下旬ごろになる。

ウルチ米のことを「ジコマイ」という。在来種にはアージコとモリタカという品種があった。旧暦の1月5日前後に水につけ、同じく旧暦2月末から3月初めごろにかけて植付けた。収穫はモチ米が早い。

ウルチ米では、新品種として農林17号、あいこく、あまみ3号などがある。あいこくは一番早く入った品種であるが、イモチ病に弱い。あまみ3号は、入って5、6年になる。これはイモチ病に

強いうえ、粒も大きく供出米に適している。収穫は旧暦6月初めごろである。

苗代は、昼の間は水を放出して干し、夜間は満水した。鴨の害を防ぐためである。現在も1期目はやっている。苗代のアブーシ（畦）の両側に2間間隔ぐらいに杭を打ち、2本づつ縄を張る。鳴り物を下げたりもする。これを「シミ」（占）という。猪に対して縄を張ったものもシミという。

苗の一握りのことを「チューニギー」という。一束のことである。30束で「チュヌキ」という。多量になると、チュヌキ、タヌキで計算する。縄をつかわない従来の植え方を「ザイライ植え」という。縄を張って植える方法を「セイゾウ植え」という。

苗とりは、たいてい男子の作業、田植えは女子が多い。むかしは、太鼓打ち・歌うたい（ウタウタウンチュ）を頼んで、田植え節を歌わせた。田植えはユイワークでやった。田を半分以上植えると、太鼓も早く打ち、田植えの人夫もそれに合わせて急いで植えた。この太鼓と歌は、大正7、8年ごろまで盛んだった。田植えは1日で終われるようにと、大勢頼んだ。午後の3時ごろからは、酒も出した。以前は、仕事を終えて家に帰り、着替えをして子どもたちも連れて夕飯を食べに来たものである。

泉田を持っている家では、田植えの前日『拝み』があった。酒と米をすりつぶしたシューギというものを泉に供える。それは現在もやっている。中村義武氏所有の田にも泉田があり、そのようなことをやっている。その田には神蛇がいるといわれている。

田植えのさい、とくに在来植えの場合、悪戯半分で誰かをツボに入れることがあった。それを「ウイークマッタン」といった。

田草取りは、素手でやる方がよい。除草機もあるが、草の多い田ではあまりよくない。回数は草の少ない田で1回、多い田で2回である。深い田のことを「フキ田」というが、「ユビ田」ともいう。このような田での作業をユイワークの人はきらう。部分的にフキ田である場合、主人があらかじめ深い所に印を立てておく。

稲作の作業について、その順序をかいつまんで述べると、次のようになる。田の荒おこしのことを「アラワーク」という。それは鋤でやったが、牛に犁をひかせることもある。犁のことをイザイという。そのあとマーガ（馬鋤）をかける。さらに植える直前にもマーガをかける。これをヴィマガという。その後へ肥料を入れ、最後の整地はT字型のシューチャ（えぶり）を使う。

肥料は、アラワークをし、「二度打ちする」と表現するマーがかけののち行う。緑肥は畑に栽培したルーピンであるが、山の木草ではツバサ（ツワブキ）や青かじをよく使った。ユーナやガジュマルはあまり使わない。堆肥（牛のクエーという）もよく使った。現在は、金肥だけを使うことが多い。また以前は、蘇鉄を刻んで入れていたが、今はやらない。

在来種のケモチゴメの植え方は次のようにやった。苗取りをする10日ほど前から田の一部分に一坪ほどの池を堀り、そこへすっかり腐らせたダイビン（下肥）を運び入れ、それに牛糞を腐らせたものを加え、かき混ぜる。田植えの前日は苗取りをし、それを一夜浸しておく。当日苗を池から出して水を切り、箱に入れて田に落とさず植えた。こうすると生育もよく、モチにねばりがつくといわれていた。この肥料のことを「ヴィーゴイ」という。あえ肥しの意である。ヴィーゴイを使わない植え方を「シラ植え」とも「ライライ植え」ともいった。ヴィーゴイの池には、その後ターヌン（水イモ）を植えた。ヴィーゴイの場所は必ずしも一定していなかったので、ヴィーゴイをつくる度

に水イモも点々と場所を移した。

稲の作り分けも行われた。それを「ツクイウェ」という。1期めの場合は、田植えと収穫は地主と耕作人が肥料と人夫を半分づつ負担する。田打ちは小作人、田草取りは両方。昼食は別。収穫のさいの分け方は半分けである。2期作は、小作人にすべてやっている。

### 稻作儀礼

種子下ろしの日にミキをつくり、仏壇に供える。ミキは、米を製粉をして水を混ぜ、それに煮芋を加え、砂糖を入れてつくる。

苗を浸水するとき、ワラの包みの中に一握りの種子を「親種子」といって、混ぜた。播くときは、親種子から播いてから他の種子も播く。播く日は、天気がよければ日中はさける。曇天ならいつでもよいといわれた。播種の日は、川の石を1個ツワブキの葉に包み、ススキの一番長い穂を刈りとって、いっしょに家の壁に吊っておいた。ツワブキは俵を意味し、ススキは、稔った穂を意味するという。稻種子は、日に干しては畦に積みあげ、それを何日かつづけたのち、保管した。

田植えを本格的に行う前に「ソイ植え」というのがあった。小さな田をえらんで一ます位試植することであった。

3月か4月に「甲子」の行事がある。字小使が朝各戸をめぐって酒のお初を集める。青年男女が村内の田の虫をとる。その虫をツワブキの葉に包み、5、6本組んだクバの葉柄のイカダに乗せて流す。終了後広場に集って各戸から集めた酒を飲んだ。

4月の王の日に「アンダネ」(アンザネともいう)の行事がある。稻の穂ばらみのころである。青ものを屋敷内で扱うことを忌み、仕事はすべて屋外です。食事もトーグラと庭を結んで行った。それに違反するとハブが入るといわれた。この日、隣り部落の手々では、客が来たら帰ったあとで塩をまいた。塩をまかれた人は、必ずハブを見るといわれている。だからハブを見たら塩をまかれたと思ってよいという。

アンダネの日に「サルスミマイ」という行事がある。正月以降ハブに咬まれた家の行事である。庭にテントを張り、親戚や隣近所から『見舞い』にやって来た。

旧6月の収穫はじめの頃、「シキユーマ」という行事がある。新米を炊いて神仏に供える日である。シキユーマの前日、テギヨウ(棒)の中心に鋸きずを入れ、両端に稻の束をさし、2、3度力を入れてわざと棒を折った。シキユーマの前に収穫を終えた家では、「ハナ・シウミ」といって、新米を炊いて隣近所にくばった。シキユーマの日には、稻穂を中柱に下げた。

アンザネからシキユーマまでの間は、鳴り物忌みの期間であった。それを「ワークサオイ」といった。

8月ごろ「コンユウェー」といって水神をまつる行事があった。各戸からミキとシューギを湯のみ1杯分ずつ集める。部落民が広場に集り、シューギを頭にいただき、ミキをいただく。水が切れない祈りである。

モチのつくり方には、「ツキムチ」と「ワイムチ」がある。ツキムチは、モチ米を蒸して臼で搗いたものである。ワイムチは、モチ米を水に浸しておき、それを臼で粉にしたうえで、さらに水でこねて蒸してつくった餅である。この2つの製法は行事によって使い分けがなされている。ツキムチ

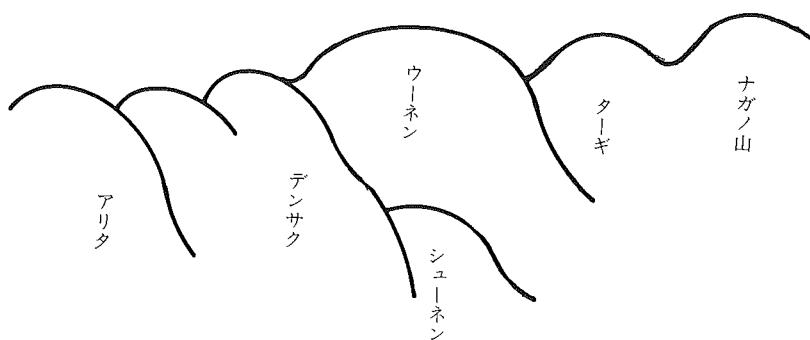
は、盆の13日、49日忌、7年忌、13年忌、33年忌などにつくる。ワイムチは、盆の15日、八月十五夜、3月3日、5月5日などにつくる。5月5日は、ムチギャーハという月桃の葉に包む。これをカサムチという。また、このほか来を盆の一杯くらい葉に包んだものを仏壇と男の子の数だけ蒸した。

### 地名のことなど

手々部落との境界あたりを「ワレングワ・ンケードー」という。そこは幽霊が出る所といわれている。

手々との境に小高い丘があって、そこをグスク（城）と呼んでいる。山部落にもある。

金見の部落から見える山には、北から順にナガノ山、ターギ、ウーネン、シューネン、デンサクアリタの名がついている。



金見の前の海には次のような地名がついている。

- |              |                      |             |                                      |
|--------------|----------------------|-------------|--------------------------------------|
| ①スンイノー       | 内海                   | ②ナガゴロ       | 長い池                                  |
| (3)フードマイ     | 大きな泊。舟が入る所           | (4)ウラグワー    | 小さな泊。舟が入る所                           |
| (5)トウイジ      | 鳥が止る瀬                | (6)コギムイ     | こぎまわる（？）                             |
| (7)ナージュニー    | 中の浅瀬                 | (8)ホージュニー   | 太い浅瀬                                 |
| (9)タージュニー    | 高い瀬                  | (10)アーミウラー  | アカメ（魚）のいる所                           |
| (11)ミジハイ     | 水の流れる所               | (12)スリンゴイ   | スリン（雑魚）がいる池                          |
| (13)フーギゼメ    | 潮が沖から吹き出してくる所。伊勢えびの穴 | (14)ムーイゴイ   | ムーイという人が魚をたくさん獲った池                   |
| (15)トンワタイ    | 飛び越える所               | (16)ヒラメ     | 平たい穴                                 |
| (17)ナガゴロ     | 長い池。網をしかけ赤い魚を獲る所     | (18)マンネゴイ   | 「馬の荷」いっぱいの魚をとり、伊仙へ売りに行ったことにちなむ。小さい池。 |
| (19)カイズネ     | 貝のいる所                | (20)シラガマ    | 白い（砂）穴                               |
| (21)ミョウマルザシキ | みよう丸（船名）が沈没した所       | (22)カンジャクゴイ | 鍛冶屋の池（内容不明）                          |
| (23)ホーマタグルセ  | 太い股の黒石               | (24)サバンヤー   | サバ（鱈）のいる所。深い。                        |

- (25)トゥーカ トンネル状の所 (26)カメンヤー 亀の家。亀の産卵地（浜）

(27)マウンヤー 猫の家（浜か？） (28)ニーズンブンシ 離れ岩で、ニーズンという人が、いつも釣りをした所

(29)フネハギグルセ 松材で船をつくっていた黒い石 (30)チナトイジ 綱を干す所

(31)ワーツケグルセ 豚を屠った黒石 (32)ハマゴンシリー 浜水の出ている所

(33)フーシノメンメシ 大きな岩 (34)クワーシノメンメシ 小さな岩

(35)イシワラントー 岩石が割れてたくさんころがっている所 (36)ウシモチゴイ 牛をひいていく池（水浴をさせる所か）

(37)イラバノヤー エラブウナギのいる所 (38)ウイギゴイ 泳ぐ池

(39)タナガンヤー くるまえびの家 (40)イビンヤー 伊勢えびの家

(41)カネティゴイ カネティという人が、はじめて泳いだ所。安全な場所  
さらに山部落の方向にむかって、次のような名がある。

(42)ハサンゴジリ ハサミ川という川の尻 (43)タチイシ 立ち岩（石）  
(川口)

(44)タチゴイ 立ち岩の下にある池 (45)ティチイシ 一つ岩（石）

(46)スジャヤリー スジャ（地名）。こわれている所 (47)ナイバマ 鳴り浜。砂を踏むと鳴るから

(48)ブリイシ 群れている岩 (49)ダルマ岳 丸い形をした山の意か

金見の浜はこの辺までで、これから先は山部落の領域になる。

### 年中行事（抄）

- (1) 旧暦7月に「浜下り」という行事がある。浜に部落中が一重一瓶を持って集り、男は沖縄角力、女は千人踊りを踊った。「千人踊り」は円をつくった踊りで、男子も老人は仲間に加わった。これを「千群おどり」ともいった。円陣の中央に歌をうたう2人と太鼓を打つ1人がいる。

その前に一年以内に生れた子どもの額に潮水をつける儀式のようなものを行った。晩はその子どもの家では、「ミ一ハマンケ」(新浜迎え)という宴をはる。ハロジや近所の人が祝いにきた。この行事は、戦後廃止になった。

(2) 7月15日の晩、ムチムレ(餅もらい)があった。青年たちがムチムレ歌を歌いながら各戸めぐりをした。曲は沖縄の「唐船ドーイ」に似ている。

1 むちぐわ たぼれ たぼれ、<sup>ヨクヨク</sup>祝ぬむちぐわ たぼれ (ユーイヤナー)  
あたらさや あていんば ひとつたぼれ (アイヤセンスル、スライトナ)

2 <sup>クイ</sup>上ん田ぐわんば わあ田ぐわ <sup>ヰナタ</sup>下田ぐわんば わあ田ぐわ (ユーイヤナー)  
来年ぬ稻がなしや 畦まくら (アイヤセンスル、スライトナ)

(3) むかし八月十五夜に山部落で角力大会があった。それを見物しに金見からも行っていたが、昭和初年から金見でも男子は角力、女子は千群踊りをやるようになった。ところが戦後も昭和30年ご

ろになって、子どもを中心とした小運動会を催すようになった。

(4) 「二十三夜拝み」は、正月、5月、9月の決った日に月拝みすることである。それを単に「おがみがなし」ということが多い。二十三夜は多いが、8日、13日、14日、15日、17日、24日、28日などである。各自の拝む日は、例えば13夜は寅、丑、15夜は戌、亥のようにエトによって決まっている。湯呑みに潮水、砂を入れ、榦やだんごを供え線香を立てて拝んだ。

(5) 豚の屠殺は、むかしは12月29日と決っていたが、戦後は25日以降となっている。区長が希望者をまとめて保健所に申請し、許可を受けている。以前は1家で1頭の例もまれではなかったが、今は3、4名で1頭の計算である。150～200斤を手ごろとしている。その後にはすぐ仔豚を入れた。肉は塩をぬって保存食にする。骨つき肉は、塩をつけ甕に保存する。10日位おいて乾燥した肉は、大阪あたりへ出ている家族に送っている。この塩豚のことを「マスツケワース」という。そして屠殺のことを「ワークッシー」という。二十日正月には、塩漬けの豚足を雑炊に入れて食べる。これを「ワンチマ・ドーシー」という。

(6) トウシヌユル（大晦日）には、天井の鼠にも供え物を供え、つぎのような唱えごとをする。

「ヤンヌシガナシ キューヤ トウシヌバン ヤレーン ツキティ、ウバン ンキヤーガイソチ、ツクユルムン ツクラチ、スサワイ アラハンゴイ、カフナクトウ アラチタボリ」

(7) この日の夕方、庭に実のあまりつかないミカンなどの果樹があれば、「成り木責め」をした。米の研ぎ汁をかけ、斧を持った人が木に向って、来年はなれるか、成れないなら伐るぞという。「ヤニヤ ナラユミ ナララニ、ナララーマ キーユシガ」とすると反対側の人が「ナラユンド ナラユンド」(なれる なれる)と答える。

(8) 大晦日の夜、寝る前に牛に草を入れる時、「アキホ サダミティ ニンブチ」(開方を定めて寝なさい)という。しかし、翌日よくない方向を向いて寝ているときは、後日杖い(キスンという)をする。若水は、牛の向っている方向の井戸から汲む。

### 補遺

(1) ケンモンの話

ケンモンは、魚の片目だけを食べると信じられている。1つの松明から、10くらい出るといわれ、人もだたす。猫のような顔で、足は地についていない。青光りもするが、松明のような光をしている。人をだまして、畑の中を引きまわすこともある。よく出る所は西の岬で、ハサンゴズリ(ハサミ川尻)附近から出る。その住いは、ウスコ木である。そのウスコの木に5寸釘を打ちこんだら出ていくと信じられている。

(2) 幽霊の声をよく聞く人

Mさんは、幽霊の声をよく聞くことができる。死者が出る前には、部落内のその方向や人の声まで聞きわかる。この人のことを「ムンキキ」のおじさんという。

(3) トイマデ

山の小鳥が家屋内に入ることを不吉とした。シャンミヤ(めじろ)、シューヒ(ひよどり)、コッカール(アカショウビン)などもこの部類に入る。このような時は、その家ではご馳走をつくり、家の屋根の見えない所で宴をもよおした。鳥は捕えて酒を飲ませ「家の災難を持って行け」といつ

て放す。浜では、探しものをする真似をし、「あった、あった」といって何かを見つけたように言って帰って来る。帰ってからは、仏壇と火の神にお茶を供える。こうして厄払いすることを「キスン」という。

#### (4) 夜遊び

むかしは、若者たちが三味線などを弾くと、そこへ女たちがやって来た。遊んでのち解散すると、女たちは宿に行く。そこを青年たちがさがして泊りに行った。

#### (5) 糸満人

山部落には、糸満系の人たちがおり、漁師が多い。戦前は沖縄から子どもたちを買って来た。このあたりからは売ったことはない。5月5日には、彼らは何組かに分れて「ハーレー」競漕をした。

糸満の魚売女は、魚を掛けで売り歩くときは、ソテツの葉をちぎるだけであるが、後日集金に来る時は、間ちがいなく集めていた。

#### (6) 新正月

新正月は、昭和35、36年から新暦でやるようになった。町からの達しによるもので、当初は反対もしていたが、現在では全部新正月になった。旧正はちょっとした馳走をつくるだけである。旧正は、砂糖きびの収穫などでむしろ忙しい。

#### (7) 産育

バーサ（芭蕉）の糸で臍つぎをする。満潮のときは安産。しかもその子は成功すると信じられている。

#### (8) トンバラ岩

金見崎の沖に「トンバラ岩」がある。むかし、その岩のところでノロの船が遭難し、岩によじ上ってただひとりだけ助かった。しかし、女ひとりだけというので、側を通る船は救ってくれず、ノロはそこでついに世を去った。戦後もひとりの女を乗せた船が、水船になって金見の浜辺に来たことがあった。むかしから、ひとりの女を船に乗せてはいけないとわれている。

#### (9) ギュウナグサミ

大阪や鹿児島から里帰りした人をハロジの人たちが、浜へつれて行き、1日漁をして遊ぶ。浜には日蔭小屋を建て、鍋をおいて獲物を料理して皆で食べ、楽しむことを「ギュウナグサミ」という。歓迎会、慰労会である。

#### (10) オキテオオハチメ

むかし手々部落に捷大八目という武将がいた。この人は首里に仕え、首里城の築城にも参加した。ある日、彼を妬む者が、下で石を削っている彼をめがけて石を落とした。それを大八目は、斧でその石を払いのけ、涼しい顔をしていたそうだ。

#### (11) 海ことば

海では、陸のものを呼ぶとき、別の呼び方をする。

(例) (1)ホーチャー(庖丁).....シリ	(2)ウーベラ(小籠).....ベントウ
(3)ハンズン(芋).....ダグ	(4)クバガサ.....ナーバ
(5)水.....アマモン	

(12) 木を伐る日

山の木は、甲・乙・壬・癸、の日は伐らない。丙・丁・庚・辛の日に伐る。また「ズクワの日」といってよくない日がある。これは土中から火が吹き出ると信じられている。この日は農作物の植付けはしない。稻種子を浸す日は、酉の日と天火、土火をさける。

(13) トシワシリ（年忘れ）

ハロジの多いところでは、12月15日頃から始めた。今流にいえば「忘年会」のことである。現在は、12月25日に公民館に部落中が集ってやるようになった。翌年61、73、85歳を迎える人たちを招待して行っている。

(14) トウシヌユウエ（年の祝い）

昔は、正月3日以降の初エトの日に61、73、85歳の祝いをしたが、現在は3日に決め部落での合同祝賀にしている。合同にしたのは昭和30年ごろである。祝いに当った家では酒を出し、部落民は1人につき20円を出す。その日の料理は、参加者の弁当から一片ずつ集め、主賓である当り年の人にあげる。あとでその家では、部落民に記念品をくばっている。

昔は、膳に昆布・塩・魚を盛り、神酒もおいて、客と拝みに来る人との間で献酬があった。客は「シラギ、ムレガ、キエタン」（白髪をもらいに来ました。=あやかりの意）といった。